女性議会議事録（令和４年８月１１日開催）

質問者	発言者	発言内容
２湯浅	湯浅かおる	加西病院の新病院建設の課題について質問いたします。 保健医療体制の中で加西病院のおかれた立場と限界について、市民、特に家族の健康を守る立場にある人たちに分かりやすく説明していただきたいと思います。とりわけ市民からの要望の高い、急性期医療の領域について外来部門、手術部門のことも含めて説明を求めます。
	新病院調整担当理事	新病院への大きな期待を込めました質問ありがとうございます。まず、病気やケガの初期療を担う急性期医療を新病院での対応ですが、令和７年度予定の新病院開院後も心身の命を守る市内唯一の総合病院として、引き続き急性期医療の確保をしていきます。一方で、昨今の深刻な医師・医療スタッフ不足の中で、当院はじめ北播磨圏域のすべての病院が一様に高度な急性期医療を展開していくことは困難な状況です。そういった中で周辺地域と連携し、役割分担を行いながら全体として地域医療を守っていく必要があります。当院としては、北播磨総合医療センター、加古川中央市民病院、はりま姫路総合医療センターを基軸病院として、当院はそれらのサテライト病院として協定を結んでいます。そのため重篤患者や高度救命措置を含む高度急性期医療については、これらの基軸病院が担い、当院は急性期医療の中でも救急は、初期治療の部分を担い、応急措置や状態によっては適切な病院の照会等を行います。一方でこれらの拠点病院の急性期を終了した患者様に対する復活期治療の継続や地域の診療所・施設からの紹介のあった患者様への治療を迅速に対応できるような体制を充実さる方針です。 外来部門を含め、新病院開院時には今の診療科目をそのまま残す予定です。その後は、人口減少による診療患者数の減少等も勘案しながら、この北播磨医療圏における機能分化、連携強化により、診療科目の検討をしていくことなります。 具体的には、内科、外科、整形外科、麻酔科、救急科については、入院外来ともに継続します。その他の診療科は、当院の強みを活かしつつ、地域での機能分担を考慮し、存続の有無について検討していきます。 特に、医師不足が深刻な産科については、北播磨と東播磨の広域の中で機能分担を図っていくことになります。すなわち、当院では出産は出来ませんが、産後ケア事業として、授乳の指導、母親の悩み相談等の心理的支援、新生児および乳児の状況に応じた具体的な育児指導、家族等の身近な支援者との関係調整、地域で育児をしていくうえで必要な社会的資源の紹介等を継続していく予定です。その事業継続のためにも当院における人材の確保につとめていきます。
	湯浅かおる	加西病院の地域包括病棟が地域に果たす役割について分かりやすく説明してください。先程は外来部門について説明がありましたが、私が働いていた数年前は地域包括医療についての利用者側の理解不足があり、高齢者家族の市民など

		からは 3 カ月しか入院させてくれないという声をしばしば耳にしました。新病院になった場合、市民の様々な要望に応えるような方向で変化するのか、どのようになされていくのか教えてください。
	新病院調整担当理事	地域包括ケア病棟の運営についてお答えします。地域包括ケア病棟とは、病状が安定した後、安心してご自宅に帰るために身体の状態を整え、自宅での生活の準備等を行うために入院する病棟でございます。この回復期を担う病床数については、高齢化に伴い北播磨では将来不足することが予想されています。そのため病床数は現在 73 床ですが、新病院開設時には 72 床に、その 5 年後の令和 12 年度には 80 床と増床を図る計画となっています。この増床については、住み慣れた地域で疾患があっても暮らしを続けられるよう、当院としての機能をきちんと明確にしたうえで充実をしていきたいという方針の表れと認識ください。 具体的な例では、先程の三拠点病院の急性期治療を終えた患者様は、早期に退院を求められる側面があり、当院ではそういった患者様を間断なくサポート、受け入れできる体制を整えます。また、地域の診療所や施設の患者様のうち、急性期に移行しつつある病状の患者様の受入強化にも対応するものであり、当地域のこれからの超高齢化社会における地域包括ケアシステムの充実のために是非とも当院をご利用していただければと思います。 その包括ケア病床の運営については、当院の医療介護総合支援センターがキーステーションとなり、病院、診療所、施設間の連携のみならず、今後は介護にあたる家族の皆様の介護負担の軽減にもお役に立てるよう幅広い利用に積極的に努めてまいります。
	湯浅かおる	丁寧なご回答ありがとうございます。特徴的な看護ケアを提供する、例えば専門の患者さんの抑制を軽減するとかそのような知識を持ったスタッフを充実するなど増床に見合った対応を望みます。 ３、新病院の建設にあたって、市議会では病院の不要論などが取りだたされたことを漏れ聞いておりますが、今回のパンデミックでは、地域の医療における加西病院の役割の大きさを市民の多くも理解したものと思われます。今後再びやってくるかもしれないパンデミックに備えて、感染病床の継続、拡充をどう図っていかれる予定なのかお答えください。
	新病院調整担当理事	感染症病棟については、現在北播磨唯一の第二種感染病床 6 床を保有する病院として、今回の新型コロナ禍において、北播磨の中で中心的な役割を担ってきました。昨今の新型コロナウィルス患者の増加に対応するため既存の 6 床に加え、新たに 15 床を増床し、現在 21 床を感染病床対応の病床として確保しています。昨年度一年間の当院での新型コロナウィルス感染関係の入院患者数は、のべ 2,675 人であり、北播磨でも令和 2 年の新型コロナウィルス感染発生直後か

		らいち早く対応してきました。 　今後のコロナの感染状況を踏まえて、現在の病床数は変動していくことが予想されますが、新病院の第二種感染症病床については、兵庫県及び北播磨地域の医療機関とも協議の上、国の設置基準である４床を設置し、感染症対応をおこなっていく計画です。もちろん感染の流行状況によっては、病床数を機動的に拡大して対応していく予定であり、新病院開院後も引き続きしっかりとした感染症対策を行っていく予定です。
	湯浅かおる	只今の感染状況を受けて、実際の感染病棟は大変なことになっていると私も聞いております。今後とも感染の状況というのは予測がつかないが、備えていただきたいと切に願います。 　加西市において高齢者や市民が安心して住み続けるには医療機関としての加西病院の存在はなくてはならないものと考えております。先日、本年８月号の加西病院だよりの中で、生田院長は「近隣市に相次いで誕生した大規模センター病院との役割分担と共存のために、病院規模をある程度縮小せざるを得ない」と説明されておりました。そのような記事の内容を市民の方が理解されると有難いのですが、医療の問題は分かりにくい部分もあります。例えば呼吸器外来は医師不足のため専門外来はございません。腎臓に関しても週一くらいの診療科しかございません。また、診療科や手術項目に関しては流動的な面もございます。その都度、市民に分かるようなアピールを行っていただきたいと思います。今後、病院の規模の縮小はあっても、日常の診療はもちろん、地域との連携のために、訪問看護部門の充実や地域包括病棟におけるスタッフの充実を図っていただくこと、また、専門外や急性期の高度医療の必要時に、他市のセンター病院との連携の話がありましたが、加西病院自身がかかりつけ医の主軸としての役割を市民に理解してもらい、安心して暮らせる加西市に貢献していただけるよう、一層の期待を述べて私の質問を終わります。